

『アエネーイス』第二巻における アエネーアースと運命 (fatum)

—ローマ叙事詩の成立—

川 島 重 成

ウェルギリウスの『アエネーイス』が、ホメーロスから数多くのモチーフや道具立てやエピソードを借用していることは、否定すべくもない事実である。『アエネーイス』は前半の『オデュッセイア』に相当する部分(流浪)と後半の『イーリアス』に相当する部分(戦闘)から成立している。ここにラテン文学によるギリシャ文学のほとんど宿命と言ってよいような模倣の典型的な例がみられるのである。しかしながら、その模倣は実は外見上のことに過ぎないのであって、ウェルギリウスはホメーロスのモチーフや場面展開に拠りながらも、本質においてきわめてローマ的、アウグストゥスの叙事詩『アエネーイス』を創造したのである。

ホメーロスとウェルギリウスの特質の差異は、詩人と叙事詩との関わり方に、端的に現われている。周知のように、われわれはホメーロスという詩人を、ウェルギリウスについて知っていると同じ意味において知っている訳ではない。ホメーロスの名は、ほとんど『イーリアス』と『オデュッセイア』という叙事詩と同義であり、作品の外にホメーロスという詩人を求めても、雲を掴むに等しいことになるであろう。ホメーロスはみごとに自己を詩の中に隠蔽する術を知っているのである。したがって、ホメーロスの叙事詩の英雄たちは、詩人の心理や情念から独立して、客観的に存在しているのである。¹⁾

1) Brooks Otis, *Virgil, A Study in Civilized Poetry*, Oxford, 1964, p. 51 & passim 参照。

『イーリアス』は、「怒りをうたい給え、女神よ」(*Μῆνιν ἄειδε θεά*)という詩句で始まり、『オデュッセイア』の劈頭には、「英雄のことをわれに語り給え、ムーサよ」(*Ἄνδρα μοι ἔννεπε, Μοῦσα*)とある。ホメーロスがこのように祈る時、女神がうたうということ、ムーサが語るということに、単なる詩的象徴を越えた、あるリアリティが感じられると言ってよいのではないであろうか。詩人はここで、ムーサの語りかけに現実には耳を傾け、女神からの働きかけによって捕えられているのである。彼を通してムーサがうたい、語るということを離れて、自分でうたい、語るという行為をなしているのではない。このことと詩人ホメーロスが詩の中に全く身を隠しているということには、深い内的連関があるとみるべきであろう。

他方、ウェルギリウスの場合はどうであろうか。われわれはこの詩人について、多くの伝記上の事実を知っている。しかし、より本質的なことは、叙事詩『アエネーイス』の出来事の推移の中に、あるいは、中心人物アエネアースの心理と行為の背後に、詩人ウェルギリウスの眼があることを感じざるを得ない、ということに存する。²⁾ 彼はホメーロスの場合と違って、『アエネーイス』を「われはうたう、戦いと、そして英雄を」(*Arma virumque cano*)という、詩人としての宣言をもって始めているのである。³⁾ この「われ」とは、アウグストゥス時代に生きた詩人、ウェルギリウスであることは言うまでもないが、問題はきわめて意識的、自覚的な意味においてそうであるという点にある。この詩人の眼こそが、ホメーロスに拠る道具立ての中に位置せしめながらも、『アエネーイス』を全く新し

2) Oits はこのようなウェルギリウスの文体を *subjective style* と名付ける。Oits, pp. 41 以下参照。

3) その7行後にウェルギリウスも確かに「ムーサよ、そのことわりをわれに想い起さしめ給え」(*Musa, mihi causas memora*)と祈願しているが、これは叙事詩の *convention* に拠っていると考てよいのではないであろうか。少なくとも、ホメーロスにおけると同じ意味で、ムーサの存在のリアリティに詩人がここで触れているとは、言えないであろう。

い、ローマの叙事詩として成立させているものに他ならないのである。⁴⁾

本稿においては、以下、『アエネーイス』第二巻におけるアエネーアース像⁵⁾と運命 (fatum) の関係を特にとりあげて、それを物語の展開にそって跡づけていくが、その際そこに詩人ウェルギリウスのローマ的、アウグストゥスの観点がどのように関与しているかを検討し、『アエネーイス』をホメーロスの叙事詩とは違う、まさにローマの叙事詩たらしめているその特質に光をあててみたいと思う。

* * *

トロイア陥落後、アエネーアース一行は新しいトロイア(ローマ)の建国をめざして、イタリアに渡ろうとするが、その途次、女神ユーノーの憎しみを買って、七年の間、波間を彷徨し、ついにリビウアの海岸に漂着する。そしてその都カルターゴで、女神ディードーの歓待を受けることになる。第一巻の末尾でいよいよ歓迎の宴が備えられ、ディードーはトロイア戦争の英雄たちのことを尋ねながら、アエネーアースと恋 (amor) の杯を酌み交わし、夜の更けるまで語り合う。その最後に、彼女はトロイア陥落と彼のその後の流浪の次第を最初から聞かせて欲しいと申し出る。かくして、第二巻(トロイア陥落)と第三巻(漂泊)にわたるアエネーアースの長い物語の枠組みが整えられる。この枠組みは、第四巻に繋がっていくディードー悲劇に他ならない。ウェルギリウスはここで(第一巻 712, 749)すでにこのディードーを先取りして、「不幸な女」(infelix)と呼んでいる。このようにアエネーアースの語りがディードー悲劇に縁取られてい

4) 以上に述べたホメーロスとウェルギリウスの相違は、前者が即興的な口承叙事詩として成立したのに対して、後者が書かれた叙事詩であること、しかも推敲に推敲を重ね、10年以上の年月を経てなおかつ未完成のままに残されたと言われている、その差にも本質的に繋がっている、と考えられる。

5) 『アエネーイス』全巻にわたるアエネーアース像についての、わが国における研究文献としては、中山恒夫、「ウェルギリウスのアエネアース像」、古典古代における伝承と伝記(秀村、久保、荒井編)、岩波、昭和50年、163-188頁がある。ただしこの論考には第二巻への言及はほとんどみられない。

るということが、この悲劇そのもの、さらに『アエネーイス』の前半（『オデュッセイア』的部分と称せられる第一～第六卷）の全構成に本質的な意味を付与しているのである。⁶⁾ すなわち、そこには次のような事態の複雑な関わりが指摘されうるであろう。そもそも、ディードー悲劇はディードーとアエネーアースの恋 (amor) が彼の担わされた運命 (fatum) と本質的に相容れないところに成立する。ディードーはローマの永遠の宿敵と定められているカルターゴの女王であり、他方、アエネーアースの未来に横たわる運命とは、ローマ建国のそれである。アエネーアースの使命はローマの礎となることにあり、それは第二巻に語られるトロイア陥落とアエネーアースのトロイアからの出発という過去にその基礎を有している。したがって、彼がトロイアを脱出したという事実において、客観的にはその運命は決定的な第一歩を歩み始めているのである。⁷⁾ しかし、アエネーアースがその使命を真に自覚的に担うに至るのは、彼が主観的、心理的にも、自らの過去に訣別を告げ得る時である。それは第六巻の冥府下りにおいて最終的に成就する。冥府下りは彼が真に未来に向って甦るため、一度決定的に通過しなければならなかった過去に対する死の経験に他ならなかったのである。⁸⁾

他方、第二巻において、アエネーアースがディードーの求めに応じ、彼女の愛と同情に促されて語るトロイア陥落と彼の出立の物語は、ディードー悲劇の中に組み込まれているという構成そのものが示唆しているように、いまだアエネーアースの過去への訣別、したがって未来の運命への明確な自覚において繰り返されているものであるとは言い難い。もちろん、アエネーアースに自己の果たすべき義務の意識が全く欠如しているのではないことは、言を俟たない。それはトロイア陥落の恐るべき夜に、運命

6) Otis, pp. 239-240 参照。

7) 従ってその恋は、第四巻において、運命によって定められたローマ建国の使命を顧みないアエネーアースに対して、ユーピテルがメリクリウスを通じて警告を発し、彼がそれに衝撃を受けてカルターゴへ出発を決意することによって、終焉を迎えることになる。

8) Otis, p. 237 etc. 参照。

(fatum) と彼の使命の方向に逆行して繰り返された自己の行為を、彼自身が狂気、憤怒、逆上 (furor 316, 355, furens 771, ira 316, amens 314, 745) 等の話によって規定していることから窺えることであろう。⁹⁾ それにも拘らず、第二巻に展開されるアエネーアースの想起を彩っているものは、全体として過去への郷愁であり、古きトロイアと自己の存立を基礎づけ、意味づけていたものへの惜別の情と言うことができるであろう。ローマ建国の英雄は未だ真実には誕生していないのである。¹⁰⁾ そして運命 (fatum) の方向を自己のものとなしきることができないアエネーアースの心情の隙間に、これまた本質的にその運命と対立するディードーへの情熱 (amor) が芽生えたのである。その恋はまさにこの想起そのものにおいて育かれ、悲劇的な終焉へと突き進んでいく。第四巻はその展開をディードーの悲劇として捉えたものである。しかし第二巻は事実としては、アエネーアースのトロイアからローマへの出立を描いている。その限りにおいては、古きトロイアの英雄から、新しいローマの英雄が誕生しつつあるとも言えるのである。そのことは、すでに指摘したように、彼の心情に陰を落さないではないことも、また事実である。第二巻に描かれるアエネーアースの心理はきわめて屈折したものであることができるであろう。

* * *

女王よ、あなたは私に、
口にもいえない苦しみを、新たにせよと申される。
ギリシアの軍がどのように、トロイアの富と、悲しくも、
その王国を覆えし、ましたことかを、いえなどと。
その残念なことどもを、わたし自身も見ましたし、
しかも大きい役割を、わたしは演じておりました。

(II 3-6)¹¹⁾

9) 後述のように、これはアエネーアースの自己規定と言う以上に、詩人のそれであると考えべきであるが。

10) Otis, pp. 223, 224 & passim 参照。

11) 以下、第二巻の和訳による引用は泉井久之助訳(岩波文庫)を用いさせて頂くことにしたい。

トロイアの滅亡を語ることはかの時の悲嘆を新たにすることである、とアエネアースはディードーに言う。トロイアは彼の生の一切であったが故に、これはきわめて自然な感情の吐露と言うべきであろう。しかしこのことは、彼が少なくとも心理的、心情的に未だ過去と訣別し切っていないこと、未来のローマ建国の英雄になりえていないことをも雄弁に語っている。それにも拘らず、

それでもあなたはわれわれの、
破滅のさまをきくための、熱意がそれほどおありなら、
思い出すのもわたしには、つらくて悲嘆はふかけれど、
はじめてみましょう、その話。

(10-13)

と、アエネアースは語り始める。アエネアースとトロイアの過去について聞き知りたい熱意 (*amor... cognoscere... audire*) とはディードーに芽生えたアエネアースへの恋 (*amor*) の現われに他ならない。アエネアースもその *amor* に応えんとしているのである。この二人の *amor* は、アエネアースが自ら託された使命の遂行に背を向けている限りにおいて許されていたものとして、最初から悲劇的な宿命を負わされていたことは、すでに述べたところである。この小論ではアエネアースの語り、アエネアースの目撃した悲惨 (*quaeque ipse miserrima uidi*, 5) の舞台に、彼自身が未だ *dramatis persona* として登場しない場面 (13-267) と、彼がその中心に位置する (*quarum pars magna furi*, 6) 場面 (268-804) に大別される。そして *fatum* との関連におけるアエネアース像を跡づけようとしている小論の限定された観点から、まず前者を後者の展開の前提として一瞥してみたいと思う。

*

トロイアを武力で陥すことに窮したギリシア軍は、木馬を建造しその中に選り抜きの勇士を隠し、それが彼らの故国帰還の安全を祈願するミネルヴァ女神への奉納物であるとの噂を流して、テネドスの島で待機してい

た。トロイア人たちはギリシア軍の見棄てられた陣営を訪れ、木馬をどう処置すべきかを論じる。ネプトゥヌス神の祭司ラーオコオーンは木馬がギリシア軍の奸計であることを看破して、警告を発する。

諸君よ馬を信ずるな。

それが何であろうとも、わしは怖れるダナイーを、——
物を贈って来ようとも。

(48-49)

神々の定めた運命 (fata deum, 54) がトロイアに敵対するものでなかったら、ラーオコオーンの忠告が勝を征し、トロイアは今も安泰であったことであろうと、アエネーアースは往時を想起して嘆く。このアエネーアースの述懐には、神々の定めた運命 (fata deum) を感得しながらも、そこに悔恨の念以上に積極的なものを抱きえないアエネーアースの心情がつぶさに現われていると言ってよいであろう。

ラーオコオーンの警告を無視させたのは、奸計により意図的に捕虜となったギリシア人シノーンの登場であった。トロイア人たちはシノーンの装った絶望に同情し、その虚偽の話に耳を傾けた。縛めを解かれた彼は木馬建造の由来と、それがトロイア城内に持込めないように巨大なものとされたこと、もし木馬がトロイア人の手で破壊されたならば、トロイアは破滅し、万一城内に引き入れられたならば、トロイアの勝利は決定的なものとなるべく定められている、との虚偽の話を開陳したのである。時あたかも、ラーオコオーンは祭壇で犠牲を捧げていたが、二匹の巨大な蛇がテネドスから海を渡って来て、彼と二人の息子を絞め殺し、パラス(ミネルヴァ)の像の下へと身を隠した。トロイア人たちは、この身を震撼される異象を、木馬に槍を投じたラーオコオーンの不敬に対するパラスの怒りのしるしとみて、直ちに城壁を打ち壊し、聖歌を唄い、神々の祭礼よろしく歓声を挙げて、ついにこの木馬を城内に引き入れたのである。この時アポロンの女祭司、女王カッサンドラは来るべき運命 (fata, 246) を告げ報せたが、これもまた無益であった。夜になり、彼らが眠りに落ちるや、

ギリシア軍の艦隊がテネドスから押し寄せ、相呼応して、シノーンは神々の運命 (*fata deum*, 257) に保護されて木馬から勇士たちを導き出し、かくしてついに城門は開かれたのである。

以上のアエネーアースによって語られた、焦点が未だ彼自身に移る以前の、トロイア陥落の日の出来事は、ギリシア軍のトロイア攻略の決定的な武器がその奸計(木馬, シノーン)にあったということ, そしてそれに対する祭司たち(ラーオコオン, カッサンドラ)の正鵠を射た忠告にも拘らず、トロイア人たちは真相を見抜くにあまりにも愚かであり、盲目に過ぎた (*immemores caecique furore*, 244) ことを浮き彫りにしていると言えよう。その限りにおいて、一切は人間世界のドラマとして継起したかの如くである。しかしトロイアの潰滅が単なる人間世界の出来事に尽きるものでなかったことは、ラーオコオンと二人の息子たちを絞め殺した二匹の蛇の異象が暗示している。確かにトロイアの崩壊は、この異象そのものによってではなく、トロイア人たちがこれをラーオコオンの不敬に対する罰と誤って解したことによって、その具体的な一歩を踏み出したと言うこともできよう。しかしまさにこのトロイア人たちの誤解を通してこそ、運命の手が働いたのである。アエネーアースがトロイア陥落の物語において、*fata* の語を繰り返している事実は、彼が少なくともそのことは感得していたことを示している。しかし何故ラーオコオンと二人の罪なき息子たちがこの異象の犠牲にならねばならなかったかという謎には、人間の側の合理化を許さないものが残る。Otis が述べている如くに、¹²⁾ この曖昧さ、不明確さはトロイアが何故滅びなければならなかったかという、より大きな謎と呼応し、その一部となっていると言うことができよう。この運命 (*fatum*) の非合理は、それが人間との関係において人間の側から捉えられるとき、そこにどうしても陰を落さざるをえないものと言わなければならない。アエネーアースが第二巻においてトロイアの崩

12) Otis, pp. 248-249.

壊を fatum (fata) と呼ぶとき、まさにこの非合理が彼の嘆きの中に色濃く滲み出ているのである。しかしこの運命の謎は、また人間の理解を越えた事態の輝かしい展開の母胎でもあった。トロイアの死は新しいトロイア、すなわちローマの誕生へと繋っていたからである。『アエネーイス』全巻を貫いて、fatum はこの不動の真実を指向しているのである。ただ、それは第二巻におけるアエネーアースにとっては、未だ確たる自覚になるにはあまりにも謎にみちた、不明確なものであり、重苦しい現実であったと言わなければならないであろう。

*

アエネーアースの語りはつづく：眠りこけていた彼¹³⁾の夢枕に、今は亡きトロイアの英雄ヘクトールが涙を流しながら、血に塗れたままの姿で立ち現われて言う。

ああ！ もう逃げよ、女神の子。

君は自分を劫火から、奪って去れよ怨敵は、
 城壁占めてトロイアは、その頂上よりもう落ちた。
 プリアモスと祖国には、尽せることはもう尽きた。
 もしトロイアを右の手で、防ぐ折りがあったなら、
 この腕だって十分に、ふせいで見せたと思われる。
 ところでトロイアは聖物と、守りの神を君の手に、
 ゆだねているぞ、それ故に、それらを君の運命の、
 友とし、ここから奉じ去り、それらのための新しい、
 城都を求め巨大なる、ものを大海漂泊の、
 果てについて建設せい。

(289-295)

この瞬間からアエネーアース自身がトロイア崩壊の絵図の中に躍り出てくる。上に引用したヘクトールの幻の言葉は、命令と予言という形におい

13) R. G. Austin, *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Secundus with a Commentary*, Oxford, 1964, p. XIV. は、「ギリシア人がトロイアに侵入して来たとき、アエネーアースは眠っていたということ、これが彼が自己に言及する最初であることから、彼もまた木馬の奸計に欺かれ、危険に対して無邪気に備えを怠り、指導者として決して偉大でも賢明でもなかった、と推察しなければならない」と注意している。

て、すでに『アエネーイス』全巻にわたって展開される運命の全容を示していることに留意したい。すなわち、トロイアの陥落とその後のアエネーアースの漂泊のみならず、さらにそれを越えて立ち現われるべきローマ建国の輝しい栄光までが、明確に指示されている。そしてヘクトールは、アエネーアースが携え行くべき守護神像 (penates) を運命の友 (fatorum comites, 294) と呼んでいるのである。しかしこの命令も当のアエネーアースにとっては、彼を眠りから呼び醒まし、トロイアに巻き起っている擾乱を目撃させること以上の効果を持たなかった。¹⁴⁾ 彼は屋根に登って、燃え盛る火炎がシーガイオンの海峡にまで照り返えるのを目のあたりにして、ギリシア軍の奸計を悟る。彼は「劫火から逃れよ」とのヘクトールの命令を無視し、逆上して (amens, 314) 武器を手にする。事態はその時すでに武器を手にする意味もないまでに進展していたのである (nec sat rationis in armis, 314)。アエネーアースはディードーに語っている現在、その時の自己の姿を振り返って、狂気と激怒 (furor iraque, 316) が心をせきたてていたと述べている。この反省は、ディードーに語っているアエネーアースの自覚においては、敗者の苦々しい自虐を出ないと言ってよいであろう。しかしこれはさらに詩人ウェルギリウス自身の主張との二重写しにおいて捉えられるべきであろう。アエネーアースの行為は、武器を手死ぬことを名誉とする (pulchrumque mori succurrit in armis, 317) ホメロスの英雄の、換言すれば、トロイアの英雄の倫理に貫かれている。しかし詩人はそれを狂気 (furor) と呼ぶのである。それはトロイアの灰塵の只中においてローマ建国を指向する運命 (fatum) の方向に、逆行する狂気に他ならないのである。ここに古いホメロスの英雄像とは別の、新しいローマ的英雄像が模索されていると言うことができるのではないだろうか。

そこへ祭司パントゥースが敗北を喫したトロイアの守護神像を手

14) Otis, p. 241 参照。

(sacra manu victosque deos, 320) 駆けて来て、今や全てが失われたことを告げる。

ついに来ましたトロイアの、
最期の時と宿命の、日が来てついにわれわれは、
トロイア人であり終えた。イーリオン・トロイアの栄光も、
みんなあり終え今はない。

(324-326)

詩人はすでにヘクトールの幻がアエネーアースに、守護神像を手にとれ (294) と命じ、ウエスタの神像と久遠の聖火 (uittas Vestamque potentem / aeternumque...ignem, 296-297) を差し出した (effert) と述べているが、¹⁵⁾ 現実にはパントゥースがここではじめてそれ (sacra...victosque deos) をアエネーアースの手に委ねたと解せよう。¹⁶⁾ パントゥースが携えていた神像とアエネーアースがヘクトールから夢で示された神像がたとえ同一でなかったとしても、少なくとも両者には符号し合うものがみられるのである。アエネーアースはここでも、パントゥースとの遭遇がヘクトールの言葉を確認するものであることを悟らず、¹⁷⁾ かえって彼の言葉にますます殺戮 (Erinys, 337) へと狂い立ち、仲間を絶望的な戦いと死へと駆りたてる。

では死を覚悟で戦争の、
中央突破をやりとげよう。敗れたものの安全は、
安全のぞまぬことしかない。

(353-354)

15) 293-294 の penates と 296-297 の uittas Vestamque の関係については、Austin, pp. 136-137 参照。

16) Richard Heinze, *Virgils Epische Technik*, 1915⁸, Leipzig u. Berlin (1972, Stuttgart), SS. 34-35; Austin, pp. 136, 144 参照。Austin は 297 の effert は “hold out” であり、“give” ではないと解する。しかし夢と現実の関係を詩人はそれほど明確にしていなくても考えられる。W.F. Jackson Knight, *Vergil: Epic and Anthropology*, edited by J.D. Christie, London, 1967 (Part One: Vergil's Troy, 1932), p. 67 参照。

17) Otis, p. 242 参照。

かくして若者たちの戦意に、絶望の狂気 (furor, 355) が吹き込まれ、一団は空腹に嗥り狂った狼の群 (lupi . . . / raptores . . . , quos improba uentris / exegit caecos rabies . . . , 355-357) のように、呪いと死の直中を突き進んだのである。

このアエネーアースの狂気の最初の餌食はギリシア人アンドロゲオースであった。彼はアエネーアースの一団を味方と誤認して不意打を喰い、あたかも茨の繁みに身を隠していた蛇を知らずに踏みつけた人のように、驚いて立ち竦み逃げようとするが、仲間とともに殺害される。繁みに潜伏していた蛇に譬えられたアエネーアースの一団は、今度は意識的にその蛇のように身を包み隠す。コロエプスの教示によって、彼らは今し方殺害したばかりのギリシア人たちの武具を身に纏い、狂気 (furor) に加えて、さらに奸計 (dolus, 390) をもわがものとしたのである。¹⁸⁾ 木馬の計とシノーンの虚偽の話のエピソードに浮き彫りにされていたように、奸計はこれまでギリシア人の戦略の特徴として強調されていたものであったことに注意したい。この狡猾な計略は一時的な成功を収めるが、やがて味方の攻撃を受けることになり、また正体を見破ったギリシア軍に圧倒されて、仲間はアエネーアースの周囲でつぎつぎに倒れ、凄惨な結果に終る。

その混乱の中でアエネーアースは二人の仲間と、喚声に引きずられるように、プリアモス王の館に赴き、ここで熾烈な戦闘に遭遇し、防禦の陣を張る味方に加勢しようと屋根に登ってしばしの抵抗を試みるが、アキルレウスの子、ピュルルス(ネオプトレモス)に従うギリシア軍の攻勢の前に立ち竦む他はない。ピュルルスが意気揚々と武具に輝いているさまは、

まさに毒草を、食んで育った毒蛇が、
冷たい地下に冬の日を、太々しくもやしなわれ、
今や古皮ぬぎすてて、新青春の気にあふれ、
胸をもたげてなめらかな、背中を巻いて敢然と、

18) Bernard M. Knox, "The Serpent and the Flame: The Imagery of the Second Book of the Aeneid," *AJP* LXXI, 1950, p. 392; Otis, p. 242 参照。

日に立ち向かい三叉の、舌を口からひらめかす
(471-475)

如くであったと言う。

アエネーアースが譬えられた蛇が繁みに身を隠していたのに対して、この蛇は絶対の優位に立ったギリシア軍を率るアキルレウスの子にふさわしく、晴れやかに陽光に向う。この甦った蛇は、ピュルルス、すなわち再生したアキルレウスを象徴している。しかし Knox が指摘しているように、¹⁹⁾ ピュルルスはアキルレウスをその最も残酷な側面において表象しているに過ぎない。彼はプリアモスの子ポリテーアスを、ちょうどかつてアキルレウスがヘクトールに対してそうしたときのように、両親の眼前で殺害する。プリアモスは、

アキルレウスをわが父と、貴様は嘘をいいおるが、
あれはわしには敵ながら、こんな所業はせなんだぞ。
あれは懇願するひとの、権利と信義を尊重し、
血の気の失せたヘクトールの、遺骸を返して埋葬の、
都合を与えこのわしを、無事わが国へ戻したぞ。
(540-543)

と非難する。これに対してピュルルスは、

では冥土への使者として、
亡き父へこの話、貴様は持ってゆくがいい。
わがけしからぬ振舞いと、わが不肖さの告げ口を、
折角忘れぬようにせい。さあもう貴様はこれで死ね。
(547-550)

との嘲笑の言葉を投げつけ、プリアモスを祭壇にまで引きずって行って刺殺するのである。しかしこのピュルルスを表象している筈の春の陽光の中に甦った蛇の^{シミリ}比喩には、残酷と非道に墮した英雄の暗さは稀薄であると言わなければならない。それは直接には、この比喩がピュルルスの若さと武

19) Knox, pp. 394-395.

具の輝きを表現しているからであろう。しかしはたしてそれに尽きるの
 であろうか。Knox は第二巻の *imagery* を扱った論文²⁰⁾において、木馬の
 奸計に始まり、燃えつくす炎でその極に達するトロイア崩壊の物語が、
 ラーオコオンと息子たちを犠牲にした二匹の蛇や、アエネーアースや
 ピュルルスが譬えられる蛇の^{シメリ} 比喻のような明白なかたちにおいてのみなら
 ず、むしろメタファその他の表面には露わとはならない蛇の *image* の連
 鎖によって綴られていることを論証した。Knox は蛇のモチーフの第二
 巻全体にわたる連関を背景にして、トロイアの最後の夜の最も戦慄すべ
 き事件(プリアモスの殺害)の直前に置かれた^{シメリ} 蛇の比喻は、直接の
 ピュルルスとの関連を越えて、(蛇が一般に自然全体に通じる生と死と再
 生のプロセスを表わす普遍的な象徴であるところから)ここでは、敗北し
 たトロイアの救いの約束をも示唆していると解釈する。この象徴はプリ
 アモスの運命が一老人の悲惨な死以上のものであること、むしろこの死は
 一つの誕生の部分であることを示していると彼は捉えるのである。²¹⁾ アエ
 ネーアースは彼がつぶさに目撃した老王の死を語り終えて、

プリアモスの命運 (*fata*) は、こうしてここで絶えました。

(554)

と言う。アエネーアースの心情を通して見る限り、この *fata* に残酷な
 運命への慨嘆以上の響きを聞きとることは困難である。しかし同時に詩人
 はこの *fata* によってはるかに新しいトロイアの再生を指し示している
 と解することができるであろう。

事実、プリアモスの最期を眼にとめたことが、アエネーアースをトロイ
 ア脱出の使命の、少なくともその方向に向わせる、最初の契機となるの
 である。アエネーアースはここで老王と同年輩の父アンキーセース、そし
 て打ち棄てられた妻のクレウーサ、幼い息子ユールス、またわが家の略奪

20) 註 18) を参照。

21) Knox, p. 395.

の危険に思いを致し、はじめて恐怖の念を抱いたからである。もちろん、アエネーアース自身にとって、この家族への懸念は彼の究極の使命に直結していた訳ではなかったが、²²⁾ 客観的には、彼の使命達成への第一の前提条件となったのである。しかし時あたかもウェスタの神殿に蹲っているヘレーナを見つけ、アエネーアースの心は再び火と燃え、復讐せんといきり立つ (*exarsere ignes animo; subit ira...*, 575)。この最後の足掻きを抑えたのは、母ウェヌスの介入であった。²³⁾

どんな大きな悲しみが、あつてそんなに怒るのか、
わが子よそんなになぜ狂う。

(594-595)

女神は息子の激怒と狂乱を諫め、彼の心を再度、見棄てられ、危険な情況に置かれている家族へと連れ戻す。そしてウェヌスは、トロイアの潰滅をもたらしたのはヘレーナでも、パリスでもなく、神々の、まさに神々の無慈悲 (*dium inclementia, diuum*, 602) であると教示し、アエネーアースに、ネプトゥーヌス、ユーノー、パラス、そしてユーピテル自身がトロイアの破壊に携わっている姿をまざまざと見せつけ、逃亡を命じるのである。ここでウェヌスはアエネーアースに密着した女神として、彼の立場に立って、*dium inclementia, diuum* と言っているであろう。しかしこれはやはり新しいトロイアを指向する神々の定めた運命 (*deum fata*) の現われに他ならなかったのである。

アエネーアースはついにウェヌスに守られて、火と敵の間を潜り抜けて

22) Otis, pp. 243 以下参照。しかし、この家族への懸念も、トロイアへの忠誠も、ローマ建設の使命も、ともに *pietas* の語で表現されうる。Cicero は *pietas* を、その家と国家に関わる両面を踏まえつつ、次のように簡潔に定義している。“*justitiam cole et pietatem, quae cum sit magna in parentibus et propinquis, tum in patria maxima est.*” (*De Republica* VI 16)。そのようなものとして、*pietas* は同時に「敬神」でもあることは言うまでもない。『アエネーイス』において、*pietas* の特にローマに関わる意味が前面に出てくる例として、第一巻 151 が挙げられよう。

23) Knight, p. 69 はこれを悲劇の *deus ex machina* の手法と関連させて、「この瞬間が絶望から希望への転換点である」と述べている。

家に帰り着く。彼はアンキーセースを救出しようとするが、父はトロイアが陥落した今、これ以上生命を長らえることを拒絶する。祖国を喪失したアエネアースの生を支えている唯一の根拠は孝道である。父を残してトロイアを去ることは考えることすら許されない。アエネアースは妻子ともども、のしかかる運命 (*fatum*, 653) にさらに新たな重荷をかけないようにと涙を流して父に懇願するが、アンキーセースは聞き入れない。このようにして生のわずかに残された根拠を取り去られたアエネアースは、己れの眼前で、父が、妻と子が、ピュルルスに虐殺されるとの思いに耐ええず、死を決して再び絶望的な戦闘に身を投じようとする。アンキーセースの決意は、トロイアの滅亡に殉じようとするもので、祖国への忠誠の発現である。これはプリアモス王の悲惨な死を目撃し、ウェヌスの命令を耳にする以前のアエネアースを絶えず支配してきたのと同じ、古きホメロスの英雄の倫理に基づいている。しかし、この家族が生きのびなければならないのは一体何故なのか、というあの運命 (*fatum*) に関わる真実が露わになるために、このアンキーセースの抵抗は不可避であったと言うべきであろう。²⁴⁾

アエネアースの絶望は人間の力では絶対に癒しえず、*deus ex machina* によって、²⁵⁾ いわば超越的に解決される他ないものであった。時あたかも異象が現われる。ユールスの頭に炎が立ちのぼったのである。他の者が恐怖に襲われ右往左往する中で、アンキーセースのみは歓喜に溢れ、ユーピテルに祈りこの吉兆の確証を求める。

おお全能のユーピテル神、ただこの一つのお願いを、
 どうかお聴き下さるよう。仮にもあなたがわれわれの、
 いのりを嘉されわれわれの、帰依 (*pictas*, 690) が御意に適うなら、
 これについての御しるしを、父よ、下して前兆を、
 更に固めてわれわれに、顧み垂れて下さるよう。

(689-691)

24) Otis, p. 245 参照。

25) Heinze, S. 57 参照。

690 の *pietas* は第一義的にはアンキーセース＝アエネーアース一族の敬神であるが、それは単に宗教的であるにとどまらず、同時にトロイアの市民としての祖国への義務をも意味している。しかしこの *pietas* は、今やトロイアに課せられた運命 (*fatum*) の真実を直覚するに至ったアンキーセースにおいては、新しいトロイア、すなわちローマへの忠誠の意味をもすでに孕んでいたと言ってよいであろう。²⁶⁾ この洞察がアンキーセース一人に与えられたことは、これ以後、彼が担わされるアエネーアースの導師としての役割を象徴的に示している。Knox はユールスの頭で戯れる炎の描写に、ラーオコオンを襲った蛇を想起させる動詞が用いられていることを指摘する。²⁷⁾ この事実は逆にこの二場面の対照性を浮き彫りにするものである。Knox の指摘を受け継いで Otis が明らかにしているように、²⁸⁾ 一方はトロイア潰滅の序曲であり、他は新しいトロイアの門出である。一方で無垢な子供たちが蛇に絞め殺され、他方では同じように無垢な子供が、火傷を受けることさえなく、未来の栄光のために聖別される。祭司ラーオコオンが神々の犠牲とされるのに対して、アンキーセースはかつてユーピテルの雷光の犠牲となった (648-649) が、今は真実の祭司となって祈願をなし、ユーピテルから希望のしるしを引き出す。ラーオコオンの場面におけるあの運命 (*fatum*) の謎に包まれた奥義が、ついに白日の下に開示されようとしている。アンキーセースが祈り終るやいなや、左手に雷鳴が轟き、闇をついて一星が煌々と流れ、イーダの山林に隠れる。アンキーセースはついに立ち上り、神々と聖なる星に向かって言う。

トロイアは
あなた方のおん庇護の、下にあると存じます。

(703)

このトロイアはすでに滅び去った古いトロイアではなく、新しいト

26) 註 22) を照。

27) Knox, p. 396.

28) Otis, pp. 247-248.

ローイアであることは言を俟たない。アエネーアースは祖国の守護神像 (penates) をアンキーセースに託して彼を肩に乗せ、ユールスの手を引き、クレウーサに離れて従うことを命じ、²⁹⁾ 家隸たちには城外のケレースの神殿で落ち合うことを約して出立する。ユールスは彼の前途に輝くローマの栄光のシンボルであり、アンキーセースはその運命 (fatum) が成就するための前提として彼に課せられている使命への忠誠 (pietas) の象徴である。彼は今や過去のトロイアと古き英雄の生に別れを告げ、未来のローマと新しい栄光に向っての第一歩を踏み出すのである。アエネーアースの前には一路ローマへのまっすぐな道が続いているかの如くである。しかし事實は、数々の苦難を彼はこれから通り抜けなければならなかったのである。その最初の試練(クレウーサの死)がはやくも出発直後に訪れる。しかもそれはアエネーアースが未だアンキーセースの如くには、運命 (fatum) と彼に課せられている使命への明確な認識に達していないこと、そして第六巻の冥府下りにおいて死と再生の経験をするまでは、その使命達成のためにアエネーアースはなお父の教導を必要とすることをもの見事に露呈するものであった。この場面を以下に多少詳しく辿ってみることにしたい。

彼らの暗闇の道を進む――

さすがにこの時、それまでは、飛び来る槍も向かい来る、
ギリシアの隊をも無視してた、わたしも今はありとある、
風の動きも気にかかり、どんな音にもハッとして、
肩の荷のため^{つれ}伴のため、ひたすら心はおびえます。

(726-729)

とアエネーアースは語る。このわずか四行のうちにまず、いかなる危険をも恐れず、自己の信念に従って敢然と死に立ち向うホメロスの武士道に生きていたトロイアの英雄としての過去のアエネーアースの姿が要約さ

29) 「離れて」(longe, 711), これは 735 のクレウーサの死への伏線である。ギリシア軍の注意を逸す主人公の配慮として言及されたものであろう。T. E. Page, *The Aeneid of Virgil Book I-VI, edited with Introduction and Notes*, 1894, London, p. 264; Heinze, SS. 60-61 参照。

れ、次にそれと全く対照的なアエネーアース像が描かれている。彼は今や生命を賭けて信じ戦っていたものを奪い去られ、さらに不可解な運命 (fatum) の重荷の下で呻吟するばかりである。彼の虚な内面には不安と恐怖、怯えと戦きが吹き抜ける。そしてすでに城門に近づき、安全に行程を通り抜けたと思った矢先に、アエネーアースは足音を耳にする。父は暗闇を見透して叫ぶ。

逃げよわが子よ、敵が来る！ 輝やく盾とひらめける、
銅の武具が見えてくる。 (733-734)

すでに不安と恐怖に苛まれていた彼は、この時、何か悪意持つ見知らぬ力に襲われて、度を失って取り乱してしまう。かくして、

その道ならぬ道辿り、
走る間に知る道の、方向はずれ、
(736-737)

アエネーアースはここまで語って、次のように絶叫する。

ああ何と、
運がわるくもクレウーサ、妻ははぐれてしまいます。³⁰⁾
道に彼女は迷ったか？ 疲れて道に蹲る？
(738-739)

736-737 の従属文が終るや、738 以下の主文は、予想される構文とは違って、heu! という間投詞のあと、二つの直接疑問文となっているのである。³¹⁾ この直接疑問文はカルターゴアの宴席で、過去を想起しているアエ

30) この一行のみ、泉井訳を離れて直訳すれば、「ああ、妻クレウーサは運命 (fatum) によって哀れなわたしから奪い去られて、立ち止ったか?」となる。なお、(下に引用する) 738-739 及び 740 に限り、原文の punctuation は Page に従う(他は、OCT, ed. by R.A.B. Mynors, 1969 を用いた)。

heu! misero coniunx fatone erepta Creusa/substitut? errauitne uia seu lapse resedit?/incertum; nec post oculis est reddita nostris. (738-740)

31) 註 30) に引用した原文 (738-740) を参照。予想されるべき文章は、incertum (est) が率いる間接疑問文であろう。

ネーアースを突如として襲った慨嘆の表白に他ならない。さらに 737 から 738 に至る文章構成法上の急転は、また 738-739 のあと 740 で平叙文に復帰するが、その間の文章の整合性の欠如³²⁾そのものが、妻クレウーサの最期を語る アエネーアースの感情の乱れをいきいきと伝えている。³³⁾ ここで、アエネーアースは、「運が悪くも…」、すなわち「妻クレウーサは運命によって奪い去られて (fata... erepta, 738) …」と言っているが、この運命 (fatum) は妻を失ったその瞬間の哀れな (misero, 738) アエネーアースにとってはまさに何か悪意もつ見知らぬ力 (735) としてしか感じとれないものであったであろう。そしてその後、七年を経てディードーに語っているこの時のアエネーアースの運命の認識も、ほとんどそれを越えるものでなかったことは、上に示した文体の特徴にまで顕著に表わされている彼の心理の動きからも察せられるところである。新しいローマを担う英雄は未だ真実の意味においては、誕生するに至っていないのである。彼はケレスの神殿に到着してはじめてクレウーサの不在に気づく。彼は我を忘れて (amens, 745) 嘆き、古き都に引き返し、狂気のように (furenti,³⁴⁾ 771) 彼女を捜し廻る。これは人間としてごく自然な振舞いと言えよう。しかし詩人はアエネーアースが古き人間の furor から未だ自由でないことも、またここで注意深く表現しているのである。

その彼の前にクレウーサの幻が現われ、狂ったような悲しみ (insano... dolori, 776) に身を任せているのを諫め、これが神々の御意なしに起ったのではないこと、アエネーアースがクレウーサを伴うのは許されないこと (nec... fas, 778-779), またオリュポスの支配者、ユーピテルも容認されないことを告げる。779 の fas はほとんど fata と言うに等しい。³⁵⁾ クレウーサの死は³⁶⁾彼が服従すべき運命の一部であることが示されたので

32) 註 30), 31) を参照。

33) Page, p. 266 参照。

34) furenti (M), ruenti (P); 但し OCT は後者をとる。

35) Page, p. 267 参照。

36) 厳密には彼女は死んだのではなく、天的な不死なる存在へと移された、と言うべきであろう。Heinze, SS. 58-59 参照。

ある。³⁷⁾ 詩人の観点からすれば、クレウーサの死は単に無意味な、不気味な虚無の力の犠牲ではなかった。クレウーサはヘクトールと同様アエネーアースの新たな門出に際して、その未来を指し示すという重大な役割を担わされた光輝ある存在へと変貌せしめられたのである。かくしてクレウーサの幻はアエネーアースが長い亡命生活と漂流ののち、ティベリス河の流れるヘスペリアの地に辿り着いた暁に、彼に王国の隆盛と王妃が与えられることを予言する。そして彼女自身は神々の大いなる母(キューベレー)に仕えて、この地に留る旨を伝えるのである。このクレウーサの言葉においても、夢に現われたヘクトールのそれに呼応して、予言というかたちで『アエネーイス』全巻が展望されているのである。とりわけ、ヘスペリアの地で、彼に新たな王妃が与えられるであろうとの言に注目したい。アエネーアースはこれを今、ディードーに語っているのである。このことが示唆しているアイロニーは明らかであろう。第四巻に至ってディードーも、クレウーサと同じく、運命によってアエネーアースから引き離されなければならない。その意味でクレウーサーの死はディードー悲劇の伏線とされているともみられうるのではないであろうか。それだけに両者の対照もまた明白である。クレウーサの死がアエネーアースに課せられた運命の輝しい部分とされたのに対して、ディードーはトローイア＝ローマの運命に抵抗し、それを拒否することによって、悲劇のヒロインになる。アエネーアースは嘆きつつも、クレウーサとの別離を受け入れざるをえない。

妻はわたしにこういつて、なお多くを語ろうと
しつづ涙すわたくしを、振り切りながら、かすかなる、
大気のうちに消えました。

(790-791)³⁸⁾

ところで、第四巻でアエネーアースとディードーが袂を分かつ場面のうち次の四行に留意したい。

37) Otis, p. 251; Heinze, SS. 59-60 参照。

38) haec ubi dicta dedit, lacrimantem et multa uolentem/dicere deseruit, tenuisque recessit in auras. (II 790-791)

こういいながらその途中、ことばをにわかにかき切って、
 悩みに堪えずディードーは、明るみ逃れてかげかくし、
 身をひるがえして彼の目を、去ればあとにはアエネーアース、
 多く語るを願いつつ、深く怖れて躊躇する。

(IV 388-391)³⁹⁾

この両場面は状況においてのみならず、表現の技巧においても、きわめて類似していると言わなければならない。同時にその対照もまた明白である。その類似と対照の両義において、両者は相呼応しているとみてよいであろう。⁴⁰⁾

アエネーアースはヘクトールの、そしてクレウーサの予言にも拘らず、これら一切が指し示す意味をほとんど認識することのないままに、父を肩にユールスをつれ、さらに驚いたことに、その間に彼を頼って亡命すべく集結してきた数多くのトロイア人の悲惨な群れの指導者とされて、暁の星の下にイーダの山へと向ったのである。

* * *

以上において、われわれは第二巻におけるアエネーアース像を、トロイア陥落の出来事の展開の中で開示される運命 (*fatum, fata*) との関連において跡づけてきた。それはカルターゴの宴席でアエネーアース自身がディードーに語るというかたちにおいて、ディードー悲劇の粹組の中で繰り上げられたものであった。このディードーとの恋 (*amor*) そのものが、ローマ建国の運命 (*fatum*) とその礎となるべき自己の使命へのアエネーアースの忠実 (*pietas*) に対する一大試練であった。そしてこの悲劇を構成する重要な一要素であるアエネーアースのトロイア崩壊と脱出の物語そのものも、運命 (*fatum*) に対する主人公のネガティブな振舞を浮き彫りにす

39) *his medium dictis sermonem abrumpit et auras/aegre fugit seque ex oculis auertit et aufert, linquens multa metu cunctantem et multa parantem/dicere.* (IV 388-391)

40) Austin, p. 286 参照。

るものに他ならなかったのである。ヘクトールとクレウーサの予言、パントウースがもたらした守護神像、ウエヌスの介入、ユーピテルからのしるしとそれを正しく看取したアンキーセースの突如とした回心等は、古きトロイアの死こそローマ建国を指向する fatum の出発であることを示唆するものであった。この運命の道筋を照らす光の連鎖に躍るシルエットの如く、アエネーアース自身は古きホメーロスの英雄倫理にしがみついて、運命 (fatum) の指向するところを悟らず、それに抵抗しつづける。それが furor, furens, amens, ira, dolor 等の語で示されたのである。しかしアエネーアースの furor は furor として留まりつづけながらも、それを超越するところからの神々の介入と、彼の欠陥を補うアンキーセースの教導により、ついに彼は、強いられる如くに、約束の地ローマを目指してトロイア脱出を敢行せしめられたのである。それはディードー悲劇の試練が運命 (fatum) そのものの確かさによって乗り越えられるのと相似の関係に立っていると言いうことができるであろう。

Otis が繰返し指摘するように、⁴¹⁾ ここには、あきらかに『アエネーイス』全巻にわたる fatum-furor (amor)-pietas 複合とでも称されるべき骨組みの一端が窺われるのである。その骨組みに肉付けをなし、『アエネーイス』を真に生命ある統一体として成立させているものこそ、登場人物たちの言葉と振舞、あるいは出来事そのものを見つめる詩人ウエルギリウスの詩眼であろう。詩人の眼はアエネーアースが躓きつづける時にも、深く同情的である。しかしこれは詩人がアエネーアースといつも同感していることを意味しない。詩人は第二巻において、アエネーアースを未だその名に値しない、しかしついには真実にローマ創建の英雄となるべき存在として描いているのである。その意味において、fatum, fata の語は、アエネーアースと詩人の観点が最も鋭い緊張を孕んで、火花を散らす場であると言いうことができるであろう。いずれにしろ——アエネーアースを通してであ

41) Otis, p. 215 & passim.

れ、あるいは彼に抗してであれ——ウェルギリウスの詩眼が『アエネーイス』に遍く感得されるのである。この詩眼、すなわち詩人のきわめて明確なる歴史的、思想的観点こそ、『アエネーイス』全巻を貫いている運命の真実を見つめ、開示し、そのことによって、この叙事詩をアウグストゥスの＝ローマ的現実の一大象徴世界たらしめているものと言うことができるであろう。本稿が検討を加えた第二巻もその有機体の一部を構成していることは言うまでもないことである。ここにホメロスの世界の道具立てに依拠しそのモチーフを借用しながらも、単にギリシアの英雄叙事詩の模倣とみなすだけではすまされない、真のローマの国民叙事詩が成立しているのである。

Aeneas and *Fatum* in the Second Book of the *Aeneid*

—Formation of the Roman Epic—

SHIGENARI KAWASHIMA

There is no denying that the *Aeneid* makes use of many motifs and episodes found in Homer, and that, in doing so, it is a typical example of Latin literature imitating Greek. But such imitation is only on the surface. In essence the *Aeneid* is not a Homeric, but very Roman i.e. Augustan epic.

The difference between Homer and Virgil is clearly revealed in the relationship of each poet to his work. In his epic Homer conceals himself utterly; the Homeric heroes exist and move independently of the poet's mind and heart. In the *Aeneid*, on the other hand, we are almost always conscious of the poet's hand in the development of events and in the psychology and actions of Aeneas himself. It is this poetic 'presence' which makes the *Aeneid* Roman or Augustan.

The present paper follows the locus of the image of Aeneas in relation to the *Fatum* (fate) which is gradually made manifest with the unfolding of events during the night of the fall of Troy. The *Fatum* makes the fall of Troy inevitable, but through the very 'death' of Troy, it aims at its 'rebirth' i.e. the foundation of

Rome. Aeneas is to live out the destruction of the old city and is, indeed, forced to do so as a predestined agent of the *Fatum*, but in the Second Book he does not yet recognize this mission heavily imposed on him. Instead, he rather tries to die as a Homeric (Trojan) hero for the cause of old Troy. Virgil calls this mental and physical state of the hero *Furor* (madness), which clearly stands contrary to the direction of the *Fatum*.

Virgil, however, is sympathetic to Aeneas, even when the hero continues along his mistaken path, but this does not mean at all that the poet approves of Aeneas' words and behavior. The poet portrays Aeneas in the Second Book not as an ideal Roman hero, but only as one yet to be born. This perceiving 'presence' of Virgil, sympathetic yet critical, reveals a historical perspective of the significance of the Augustan Age and makes the *Aeneid* the greatest representation of Roman, Augustan reality.

